HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	J. V. アンドレーエ『クリスティアノポリス』にみる宗教と教育
Author(s)	シュルーター, 智子
Citation	北大宗教学年報, 1, 47-51
Issue Date	2018-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/85643
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71510
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_6_schlueter.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【報告】

J．V．アンドレーエ『クリスティアノポリス』にみる宗教と教育

シュルーター智子

はじめに

ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（Johann Valentin Andreae　1586～1654）の『クリスティアノポリスに関する記述』[1]（1619 年）は、トマス・モアの『ユートピア』（1516 年）の約 100 年後、カンパネッラの『太陽の都』（1602 年執筆）に影響を受けて執筆されたユートピア小説である。日本においてはあまり知られていない[2]が、一般的には、モアとカンパネッラに並ぶユートピア小説の古典として位置づけられている。

本報告では、『クリスティアノポリス』に描かれた宗教と教育の内容を紹介し、今後の分析に向けて、いくつかの論点を提示したい。

１．概要

アンドレーエは、おそらく、『クリスティアノポリス』よりも、『化学の結婚』[3]の著者としてよく知られていると思われる。あるいはこの小説のインパクトが、著者の印象を凌駕しているかもしれない。『化学の結婚』は 1616 年に出版された、薔薇十字友愛団の（架空の）始祖「クリスチャン・ローゼンクロイツ」を主人公とする小説だが、その出版から 3 年後の 1619 年、アンドレーエは同じく一人称の語り手による小説『クリスティアノポリス』を発表している。

『クリスティアノポリス』は、100 章ちょうどで構成されており、前後に読者への挨拶「ごきげんよう、キリスト者の読者諸君！（Salve, Lector Christiane）」とエピローグ（クリスティアノポリスからの旅立ちと再訪の誘い）が添えられている。その物語は、難破した主人公がある島に漂着する場面から始まる。主人公は、親切な住人にその島の都「クリスティアノポリス」に案内され、異邦人に対する試験を受けた後に、従者と共に都を見て回ることを許される。自分が知る世界と比較しながら、主人公は、幾何学的に整備された都のさまざまな場所を訪れ、その素晴らしさに感嘆しながら産業や統治体制をつぶさに観察し、描写していく。なかでも主人公が感銘を受けるのが、クリスティアノポリスの宗教と教育である。

2.「宗教について」（第 28 章[4]）

クリスティアノポリスの産業と政治体制について見聞した主人公の「私」は、ここは異端的な狂信の街ではないかと疑いかけたところで、石板に金文字で刻まれた信仰告白を見つける。

> 1. 私たちは、最善で最も知恵のある、最大かつ永遠なる三位一体の神、世界を無から創造し、保ち、動かし、操る父を心から信じます。[…]
> 2. 私たちは、イエス・キリスト、神とマリアの息子を心から信じます。[…]
> 3. 私たちは、イエス・キリストによって、霊が新たになり、罪が担われ、私たちの肉の兄弟が彼と共に彼においてあり、アダムの堕落により失われた誇りが回復することを信じます。
> 4. 私たちは、キリストの生と受難と死によって、神の義が十分になされ、神の寛大さが報われたことを信じます。[…]
> 5. 私たちは、地獄の帝国と死の賜物が打ち砕かれ、神の庇護のもと、復活の勝利において安心が再び与えられることを信じます。
> 6. 私たちは、神の右で、その教会において全能かつ偏在するキリストが、言葉において霊的に、肉と血において現実に、近づき、保護し、活力をあたえ、終わりなく永遠に支配することを信じます。
> 7. 私たちは、[…] キリストの最後の審判を信じます。
> 8. 私たちは、聖霊を心から信じます［…]。
> 9. 私たちは、聖なる普遍的な教会を信じます。[…]
> 10. 私たちは、言葉のわざによる罪の許しを信じ、それに感謝し従う義務があることを信じます。
> 11. 私たちは、不信の徒が恐れる自然な死を心の限り歓迎し、それゆえ自然な生を心の限り忌み嫌うと、信徒たちが認める人すべての蘇りを信じます。
> 12. 私たちは、永遠の生を信じます。[…] [5]

この信仰告白の他にも、主人公は「道徳に関する掟が刻み込まれた石板」を見つける（第 29 章)。これら二つの石板の内容を知った主人公は、「ここにいるのはキリストの民であって、その宗教は使徒のそれと一致し、その倫理政治体制は神の掟と一致する」と、確信するのである。

3．教育について（第 51〜54 章[6]）

その後主人公は、クリスティアノポリスの学校を見学していく。

> それから私は［訳者注：建物の］上に連れて行かれた。そこには、信じられないほど広々とした、目立って美しい学校があり、8 つの講堂にわかれていた。ここでは、若者という国のもっとも価値ある財産が、神と自然と理性と福祉のために、適切な教育を受けていた。なにしろ、一人ひとりが子どもたちを社会の有為なメンバーとなるように教育する義務があるのだから、共にそれに取り組み、教育と授業のために最良の手段を見つけ、それを応用しない理由があろうか？この目的のために非常に重要なのが、市民の考えによると、このきわめて優雅な場所なのである。[7]

この学校で教える教師は、「社会の底辺の出身者ではなく、その有能さで国において大いに尊敬されている、政府の最中枢に出入りすることも頻繁な、選りすぐりの市民」である。子どもたちは、男女問わず 6 歳で親元を離れて寮に入る。その寮においては、「食事は美味かつ健康的であるよう細心の注意が払われ、ベッドは清潔で、寝室や衣服、外見もみな同様」である[8]。

クリスティアノポリスの学校では、男子と女子がそれぞれ教育を受けている。

> 男の子は午前中に学び、女の子は午後に学ぶ。女の子には、男性に劣らぬ教育を受けた女性が授業を行なう。性質からして学びに劣るわけではない＜女＞性が、どこかでは教育から排除されているのは、理解できないことである。残りの時間は、機械仕事と女性の手仕事に充てられる。誰もが気質と好みに合った仕事を割り当てられる。[9]

他の場所でも同様であるが、主人公は、クリスティアノポリスの学校制度の素晴らしさを賞賛しながらも、自分にとって既知の社会に対する批判もまた怠らない。

> ＜クリスティアノポリスの＞市民が子どもの教育にあらゆる点で誠実であるのに対して、世間ではあらゆる点でいいかげんである。その学校にいる子どもたちがどれほど不潔で、どれほど汚らわしい食事や寝室にいて、教師がどれほど非人間的か、私がこれ以上述べる必要もないだろう。なぜなら、経験してきたひとは皆、それを声高に罵っており、しかも生涯にわたってその身に傷を残しているからである。[10]

展望

以上、『クリスティアノポリス』における宗教の描写の一例として信仰告白を、また教育に関する描写の一例として学校の様子を紹介した。しかし本報告で紹介したのは、『クリスティアノポリス』における宗教と教育に関する内容のごく一部にすぎない。上に挙げた学校制度に関する紹介に続いて、各講堂での教育内容に関する詳細な説明があり、「教育」の中で扱われる「宗教」の具体的な内容もそこで明らかになるほか、宗教制度に関する説明についても数章が割かれている。したがって、それらの内容と上記「信仰告白」とを照らし合わせて、アンドレーエのユートピアにおける宗教がどのような形態をとり、それが同時代の宗教思想といかなる関係にあるのかを見ていくことが必要になるだろう。

またアンドレーエは、テュービンゲン大学での師や友人との交際をはじめとして、多くの同時代人と交流をもった。たとえば、近代教育学の父として知られるコメニウス（Johann Amos Comenius　1592～1670 年）は、主著『大教授学』（1657 年）の冒頭で、教授学の先駆者として「まっさきに名前をあげ」るべき人物としてアンドレーエの名前を挙げ、「珠玉の諸著作の中で、教会や国家の病気ばかりでなく　学校の病気も見事にあばき出し、いろいろな箇所でその治療法を示し」た[11]ことに最上級の賛辞を寄せている。こうした出会いは、近代初期における宗教と教育の新たな潮流を生み出す一つの契機となったに違いない。現代においては、薔薇十字文書にせよ『クリスティアノポリス』にせよ、宗教史や思想史といった特定の学問分野における、限定的な関心の対象として分析されることが多い。しかし今後の研究では、アンドレーエとその周辺の人々との思想的・宗教的影響関係をより広く考慮に入れながら、当時の文脈を掬い上げることで、総体としての学問的営為を問い直す端緒を見出していきたい。

---

[1] Johann Valentin Andreae. *Gesammelte Schriften, Bd. 14.* Bearbeitet von Frank Böhling und Wilhelm Schmidt-Biggemann. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 2018.

[2] ただし以下の論文がある。副島美由紀「J.V.アンドレーエの『クリスティアノポリス』―薔薇十字・敬虔主義・啓蒙主義を繋ぐユートピア」小樽商科大学人文研究第 109 号、17–48 頁、2005 年。

[3] Johann Valentin Andreae. *Gesammelte Schriften, Bd. 3.* Bearbeitet von Roland Edighoffer. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 2010, S. 255-417. ヨーハン・V・アンドレーエ

『化学の結婚』種村季弘訳、紀伊國屋書店、1993 年。

[4] ibid., S.186-193.

[5] ibid., S.187-193.

[6] ibid., S.254-263.

[7] ibid., S.254f.

[8] ibid., S.256-259.

[9] ibid., S.262f.

[10] ibid., S.260f.

[11] コメニュウス『大教授学 1 』鈴木秀勇訳、明治図書出版、1962 年、23 頁。